

人形劇の友・友好都市国際協会総会サポートを通じた国際文化交流
～2018年度地域連携事業報告（津田塾大学・長野県飯田市）～

Intercultural Exchange through Puppet Culture

—Report on Regional Cooperation in Fiscal 2018 (Tsuda University & Iida City, Nagano)—

総合政策研究所 客員研究員 大島 幸¹

学芸学部 英文学科 2年 山口もね

総合政策学部 総合政策学科 2年 増田珠美

総合政策学部 総合政策学科 2年 中川智恵

Sachi Oshima (Research Fellow, Research Institute for Policy Studies)

Mone Yamaguchi (2nd Year, Dept. of English, College of Liberal Arts)

Tamami Masuda (2nd Year, Dept. of Policy Studies, College of Policy Studies)

Tomoe Nakagawa (2nd Year, Dept. of Policy Studies, College of Policy Studies)

要約

長野県飯田市との包括連携事業として、2018年8月、飯田市にて開催された AVIAMA 総会において、津田塾大学学生 12 名が、世界の人形劇文化を紹介する英語プレゼンテーションを行うとともに、総会参加者の通訳アテンドを担った。本稿では、これら国際交流プロジェクト、特に英語プレゼンテーション実現に至る過程を報告し、参画した学生の行動や意識にどのような変容があったかを検証する。最後に、今後の取組の可能性についても考察する。

Based on the partnership agreement between Tsuda University and Iida City, Nagano Prefecture, 12 students at Tsuda University made an English presentation to introduce various puppet theaters around the world, and they also worked as an interpreter cum attendant at the AVIAMA General Assembly held in Iida City in August 2018. This paper reviews how the students realized this intercultural exchange project, especially the English presentation, and examines the changes in the students' attitudes, behaviors and awareness. The possibility of further collaboration is also examined in the end.

¹ 津田塾大学文学研究科修士課程（英語教育研究コース）修了。埼玉県公立高等学校英語科教諭（2002～2006年）、独立行政法人国際交流基金（2006～2016年、うち2009～2012年マレーシア・クアラルンプール日本文化センター勤務）を経て、2017年より津田塾大学総合政策学部非常勤講師（英語）。2018年より総合政策研究所客員研究員を兼任。直近の主な国際交流プロジェクトに、コンサート「村上春樹を『聴く』」（2015～2016、2018年：シンガポール、韓国、日本、フィリピン）や「ジュリー・テイモア（ライオンキング演出家）特別招聘」（2015年：日本）がある。s-oshima@tsuda.ac.jp

1. はじめに

津田塾大学総合政策学部は、開設以来、社会の課題解決に資する教育・研究の進展を図っており、具体的かつ実践的な取組を推進している。その一環として、2018年4月12日、津田塾大学は長野県飯田市と包括連携に関する協定を締結した。

協定の目的は、「文化、教育、学術、産業等の分野で相互が持つ資源を有効活用し、連携することにより、地域の一層の活性化及び人材の育成に寄与すること（津田塾大学, 2018, p. 4）」である。飯田市の地域ならではの魅力を津田塾大学が更に引き出し高める取組や、津田塾大学の教育・研究にあたって飯田市が実践的なフィールドを提供する取組を、継続的に行うことを目指している。

南信州地域の中核都市である飯田市では、江戸時代には飯田藩の城下町として、また三州街道の宿場町として栄えた経緯から、伝統芸能である人形浄瑠璃が受け継がれてきた。その歴史を活かした市民の手によるまちづくりとして、1979年に「人形劇カーニバル」が発足した。以来、毎年夏に国内外の劇団を招へいし、日本最大の人形劇フェスティバルである「いいだ人形劇フェスタ」を開催している。2018年は同フェスタ40周年（「人形劇のまち」40周年）を記念し、期間・招へい劇団数など、通常に比して規模を拡大した「世界人形劇フェスティバル」が開催された。

津田塾大学は、協定にもとづく最初の取組として、「世界人形劇フェスティバル」と同時開催された「人形劇の友・友好都市国際協会（Association Internationale des Villes Amies de la Marionnette、以下 AVIAMA と記載）第7回総会」の機会を捉え、歓迎レセプションにて総会参加都市を紹介する英語プレゼンテーション（資料1、2参照）を行うとともに、総会参加者の通訳アテンドを担った。自治体や市民の活動に参画し、人形劇文化を介した国際交流の一助を担ったことは、参加者である筆者らにとって得難い経験であるばかりでなく、総合政策学部としての活動成果でもある。本稿では、これら AVIAMA 総会に関連した津田塾大学の取組を報告し、今後の地域連携事業のさらなる発展や改善への考察を行う。

2. 目的

本プロジェクトの目的は、①AVIAMA 総会レセプションにおいて、使用言語が異なるレセプション参加者が楽しめるよう、人形劇の歴史やこれからの人形劇文化の展望についての英語プレゼンテーションを行うこと、および、②総会参加者の通訳アテンド実施の2点である。さらに、これら国際文化交流体験を通して、学生意識にどのような変容があるか検証するとともに、今後の取組の可能性についても考察することを目的とする。

3. 取組の経緯・手法

包括連携に関する協定締結以降、2018年8月10日～12日の AVIAMA 総会に向けた取組の経緯は表1のとおりである。

表1 取組の経緯（2018年4月～8月）

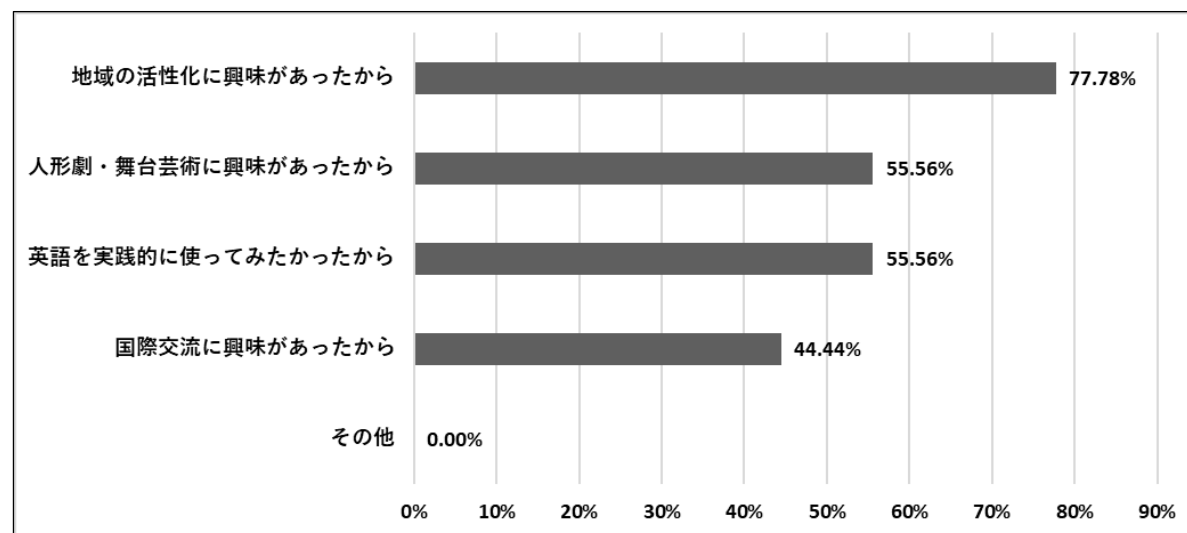
4月12日	飯田市と津田塾大学との包括連携に関する協定締結
4月20日	包括連携に関する協定締結記念講演会（於 千駄ヶ谷キャンパス） （牧野・飯田市長、原田・いいだ人形劇フェスタ実行委員長）
6月2日～3日	津田塾大学「千駄ヶ谷キャンパス祭」人形劇招へい （ましゅ&Kei、劇団ふたご座）
6月17日～19日	飯田市スタディ・ツアー
6月29日	江戸糸あやつり人形一糸座訪問
7月5日	公益財団法人現代人形劇センター訪問
7月10日	AVIAMA 通訳アテンド説明会
8月10日～12日	AVIAMA 総会本番（英語プレゼンテーション・通訳アテンド）

3. 1 プロジェクトメンバーの選出

上記2. に記した目的実現のため、津田塾大学全学を対象にプロジェクトメンバーを公募した結果、12名（総合政策学部9名、学芸学部3名）が決定した。人形劇芸術を専攻している者や、人形劇に関する知識がある者はおらず、学生の参加理由は「地方の活性化に興味があった」が約80%を占めた（表2）²。これは、「地方地域の課題を解決する力を養う」ことを目指す総合政策学部にも所属し、学内での学びをより実践的に深めたいと感じる学生の参加が多かったためと考えられる。

総合政策学部は千駄ヶ谷キャンパス（東京都渋谷区）、学芸学部は小平キャンパス（東京都小平市）に位置しており、物理的に離れていたが、キャンパス間のテレビ会議システム、および、電子メール（メーリングリスト）を活用し、メンバー間の協議を進めた。

表2 学生の参加動機



（回答数9名、複数回答可）

² 学生に対する事後アンケートは「津田塾大学個人情報保護方針」に則り実施している。

3. 2 飯田市スタディ・ツアー

通訳アテンドの下見、および、飯田市の魅力を幅広く知る機会とすべく、6月17日から6月19日までの2泊3日、スタディ・ツアーが実施された。

初日（6月17日）は「よこねたんぼ」（棚田）を見学後、牧野光朗飯田市長から、飯田市の地域経営、イノベーションが起こる地域社会創造を目指すために行なっていること、地域自治と公民館についての講演があった。その後、4グループに分かれ農家民泊を体験した。宿泊先では、学生が市民から見た飯田市や地方自治についてインタビューをし、飯田市の細かな事情や現状について、より深く学ぶ機会を得た。

2日目（6月18日）午前は、飯田市文化会館にて、各学生が農家民泊で得た情報や体験について共有した後、「いいだ人形劇フェスタ」と、2018年に飯田で初開催となるAVIAMAや「世界人形劇フェスティバル」への取組について学んだ。「いいだ人形劇フェスタ」については、4月20日の協定締結記念講演会（表1参照）などから事前に情報を得ていたが、改めて詳細な話を伺い、同フェスタの歴史や自身の文化を誇りにしている飯田の風土について学ぶことができた。AVIAMAや「世界人形劇フェスティバル」に向けた取組の例としては、海外からのゲストに備え、英語対応に注力している様子が紹介された。また、飯田市の高校生たちが英語を使うボランティアとして期待されていることも分かった。最後に、飯田市文化会館に隣接する飯田人形劇場の館内視察もした。

2日目午後は、通訳アテンド都市ごとにグループに分かれ、各グループにて飯田市街を見学した。その後、NHK人形劇『三国志』で知られる人形美術家である、川本喜八郎³氏の人形が寄贈されている「川本喜八郎美術館」内にて、いいだ人形劇センターの職員の方と意見交換をし、人形の操作を体験した。次に訪れた「黒田人形浄瑠璃伝統館」では、地元に伝わる人形浄瑠璃である黒田人形の歴史、浄瑠璃で使用する音楽、上演する際の建物や建築技術などについて話を伺い、人形遣いも体験した。両施設で実際に人形に触れる経験を得たことで、「人形を動かす」ことがどのようなことか、人形を劇で使うことがどれだけ難しいかを実感することとなった。

最終日（6月19日）は、飯田市の観光実態についてヒアリングした後、2人1組に分かれて3日間を振り返り、8月の「いいだ人形劇フェスタ」、更に2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けての提言作成をし、発表を行った。「いいだ人形劇フェスタ」やAVIAMA会場の視察、飯田市の伝統工芸である水引ワークショップ体験も行った。

3. 3 人形劇に関する外部機関訪問

英語プレゼンテーション準備のため、6月下旬、学生一人当たり2～3都市の担当を決め、

³ 川本喜八郎（1925～2010）氏は、千駄ヶ谷キャンパスのある東京都渋谷区千駄ヶ谷出身であり、渋谷区ヒカリエ内にも「川本喜八郎ギャラリー」がある。詳細は以下ウェブサイト参照。
https://www.city.shibuya.tokyo.jp/shisetsu/bunka/kihachiro_gallery/index.html

各国の人形劇文化について調査を開始した。しかし、既に飯田市でのスタディ・ツアーを経ているとはいえ、人形劇の知識がまだまだ充分でない状態で学生が調査を始め、プレゼンテーションに耐えうる内容にまで理解を深める困難さは想像に難くない。そこで、background knowledge⁴醸成の観点から、指導教員側で以下2箇所への訪問機会を設けた。

(1) 江戸糸あやつり人形一糸座

6月29日、江戸糸あやつり人形一糸座（以下、一糸座と記載）稽古場を訪問した。江戸時代から現存する唯一の糸操り人形劇団「結城座」の流れをくむ劇団であること、AVIAMA参加国であるチェコほか欧州各国との共同制作の実績を有していること、そして2018年「世界人形劇フェスティバル」での公演が決まっていたことが、訪問理由となった。

一糸座では、座長である結城一糸氏より、日本の文楽・人形浄瑠璃をはじめ、日本全国にある数々の人形劇文化についての詳細だけでなく、海外の人形劇文化がどのように日本の人形技術と交差して行ったのかをお話しいただいた。また、糸あやつり人形を実際に手にとり、操作する方法も体験させていただいた。思っていたよりも重い人形は、なかなか思い通りに動かず、学生皆が難しさを感じ、改めて人形遣いの専門性を体感することとなった。

結城氏は「日本古来の糸あやつり人形の技術が、結城座・一糸座にしか伝承していないこと」や「日本独自の人形劇文化の存続に対する不安」などを例示した上で、伝統技術を新たな場面で使用する経験値を上げていくことが、現代における人形劇文化の活路になるのでは、というご自身の見解を示してくださった。この結城氏の考えは、英語プレゼンテーションに津田塾からのメッセージをいかに含めるべきか、という学生の悩みを解決へと導く端緒となった。

(2) 公益財団法人 現代人形劇センター

次に7月5日、現代人形劇センターを訪問した。古典から現代に至る日本の人形劇の普及活動や、海外の人形劇の招へい・調査研究を行っている。国内外の人形劇について網羅的に情報を有する機関であり、2018年の「世界人形劇フェスティバル」では、ラオスの現代人形劇アーティストを飯田市に招へいしてワークショップを実施するなど、飯田市との関わりも深いことから訪問先とした。

当日は、同センター理事長の塚田千恵美氏、同理事の松澤文子氏にお話を伺った。塚田氏は主にアジアの人形劇事情、松澤氏はヨーロッパの人形劇事情に詳しく、各国の人形劇の歴史・文化背景から、他国との共同制作公演のエピソードに至るまで説明を受けた。学生からは、英語プレゼンテーションに向け、インターネットでは入手できない情報や生の声を得るべく、時に個別具体的な事項についても質問したが、一つ一つに詳細な情報・アドバイスをご提供いただいた。

⁴ Background knowledge とは、「文章を解釈・理解する際に活用する一般的、文化的、または特定のトピックに関する事前知識」（Grabe & Stoller, 2011, p. 284）を意味する。学習者にその事前知識が全く無い場合、文章理解は非常に困難と考えられており、指導過程においても Reading/Listening 活動の前に background knowledge を醸成することが有効とされている（Grabe & Stoller, 2011; Richards & Burns, 2012 など）。

指導教員側で設定した外部機関訪問は以上2件であったが、これら2件の訪問経験から、実際に足を運んでこそ得られる情報があることに気づいた学生もあり、自ら関係機関を訪問したいとの希望も寄せられた。そこで教員より、希望のある学生に対しては各国文化機関など候補となる訪問先情報の提供も行った。その結果、学生独自でアポイントメントをとり、チェコセンター（在京チェコ共和国大使館内）や喜之助人形劇フェスタ実行委員会（岡山県瀬戸内市）への訪問を実現している。

(3) チェコセンター

チェコのプルゼニ（Plzeň）市担当学生が、東京都渋谷区にあるチェコ共和国大使館に隣接する「チェコセンター」を訪問した。チェコセンターでは、チェコの人形劇の歴史・文化背景や、チェコの人形の代表格であるマリオネット（操り人形）の現在の姿についての情報を得ることができた。チェコにおいて人形劇が重要な伝統文化であることは、インターネットから事前に把握できたが、観光資源としてのチェコ人形劇の最新情報や、チェコ語で書かれたチェコ人形劇写真集などは、直接話を伺わないと得られなかった。訪問先で得た情報により、プレゼンテーション内容の確度を高めることができた。

(4) 喜之助人形劇フェスタ実行委員会（岡山県瀬戸内市）

AVIAMAにオブザーバー都市として参加した瀬戸内市の担当学生グループが、岡山県瀬戸内市にある「瀬戸内市立図書館」を訪問した。瀬戸内市伝統の竹田喜之助人形の仕組みや特徴についての調査に加え、その代表作『雪ん子』についての情報収集を行った。

3. 4 英語プレゼンテーション準備：各国の人形劇文化調査

上記3.3の外部機関訪問と並行して、各国の人形劇文化について調査を進めた。

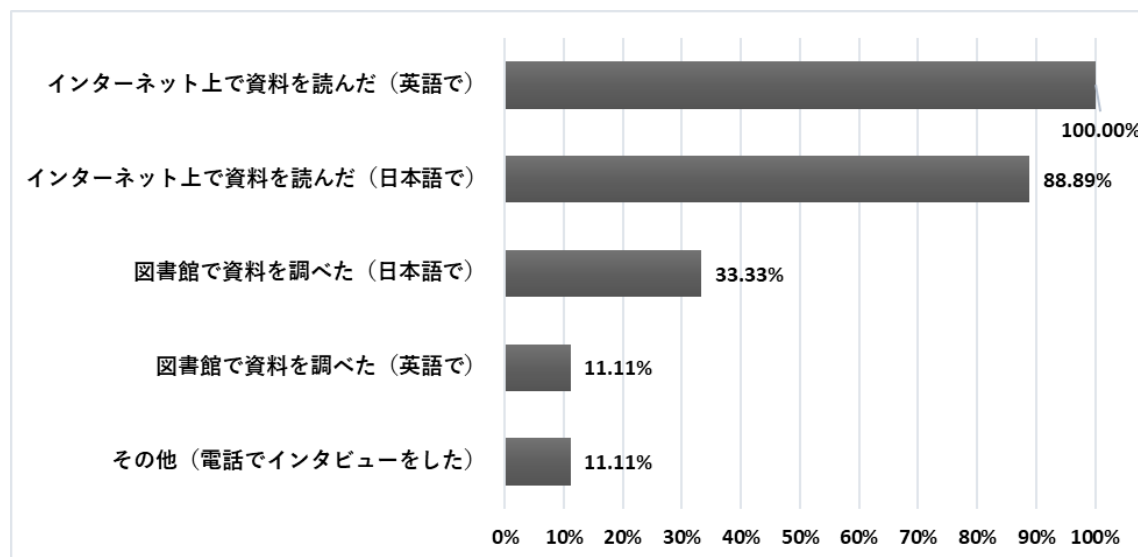
学生への事後アンケート（表3）によると、「インターネット上の資料を読んだ（英語で）」が100%、「インターネット上の資料を読んだ（日本語で）」が88.89%と、インターネットを活用した調査が中心であったことが分かる。

調査開始直後は、インターネットでどのように検索すれば知りたい情報が得られるのか分からず戸惑う学生も多かったが、検索ワードを工夫するなど徐々に情報収拾の精度を上げていった。海外の人形劇文化について調査するには日本語のウェブサイトには限界があり、主に英語の資料を活用した。つまり、学生は情報を得るというタスク⁵のため、自ずと英語Readingをせざるを得ない環境に身を置いたことになる。また、担当都市によってはフランス語、スペイン語など他の言語を用いたインターネット検索、韓国語の資料などは日本語・英語への翻訳機能を用いた情報収集も行われた。図書館における資料収集については、日本

⁵ 英語プレゼンテーションの指導に際しては、Task-Based Language Teaching (TBLT)を念頭に置いた。TBLTとは、学習者にタスク（課題）を与え、そのタスク達成のために必要なコミュニケーションツールとして英語を使うことで、学習者の英語運用能力を高めるアプローチを言う。本論文で使用する「タスク」はEllis (2003, cited in Ellis & Shintani, 2014, pp. 135-136)の定義に基づく。

語資料を調べた者が 33.33%、英語資料を調べた者が 11.11%であった。「人形劇に携わる人に電話でインタビューした」と回答した学生もいた。

表 3 調査手法（外部機関訪問を除く）



（回答数 9 名、複数回答可）

3. 5 英語原稿作成

上記 3.2 から 3.4 の調査内容を元に、英語プレゼンテーションの原稿作成（英語 Writing）を開始した。まず調査担当都市ごとに英文原稿を仕上げた後、7月下旬には全都市の原稿を一つのプレゼンテーションとして統合した。統合したプレゼンテーション原稿は、「Google ドキュメント（google docs）」⁶ファイル共有機能を活用し、教員・学生全員で原稿を共有しながら編集・改善を加えていった。また人形劇文化についての調査を進めていくにつれ、学生から自ずと「プレゼンテーションは、各都市の人形劇紹介だけでなく、AVIAMA 参加都市が『つながる』ようなものにしたい」という意見が出された。そのため、新たにプレゼンテーション冒頭と締めくくり部分も考案し追加した。

Google ドキュメントの使用は2つの点で大いに役立った。第1に、各学生が好きな場所で、好きな時間に原稿を編集できたことがあげられる。津田塾大学の第2ターム期間（6月中旬～8月）には、学生には必修科目の授業がない。英文原稿作成はちょうどこの期間中に行ったため、学生同士が学内で直接会って話し合ったり、進捗状況を還元し合ったりすることが困難だった。Google ドキュメントにより、学生間の円滑なコミュニケーションが生まれ、原稿についてリアルタイムで連絡を取り、互いにコメントをつけるという副産物も得ることができた。第2に、進捗状況をみて、誰にどんな連絡をすべきかが明確になった。予定よりも進捗が芳しくない時や、他都市に比べ作成がうまくいっていない部分がある時に、オ

⁶ Google が提供している、特定のメンバー間でファイルを共有し、同時編集・共同作業が可能となる機能を指す。

ンラインで履歴や状況を確認し、互いに即座にサポートすることができた。

上述の「AVIAMA 参加都市が『つながる』ようなプレゼンテーション」という課題は、当初、非常に悩ましいものであった。しかし、各都市の調査や外部機関訪問などで得た知見から、「人形は間接的表現に寄与することができる。そして、人形劇の表現技法は、大人から子供までの全ての世代を魅了するものになり得る。」という指針を生み出すことができた。これに伴い、各国における人形劇の最新情報をどのように原稿に取り入れていくのか、更に熟慮を重ねた。

なお、原稿の確認と監修においては、名古屋大学大学院国際開発研究科に所属する留学生 6 名⁷から、多大な協力を得たことを記しておきたい。草稿がまとまった時点で彼らにチェックを依頼し、英語としての不自然さがなく意味が通じるか、という点や、外国人の視点から見た日本文化の説明として無理がないか、という点を検証してもらった。その結果、辞書では把握しきれない同意語の語感の違い（suggest と propose など）や、より自然に聞こえる英語の文章など、細かな指摘や提案を得ることができた。

3. 6 スライド作成

3.5 に記した原稿作成と同時並行して、「見ている人たちが、言葉を超えて楽しめるプレゼンテーションスライド」を目標に作成を進めた。

プレゼンテーションは、大きく分けて 2 部構成となっている。第 1 部では、いいだ人形劇フェスタのマスコットキャラクターである「ぽお」が AVIAMA 総会参加都市を巡りながら、人形劇の歴史や特徴、文化背景などを紐解いていく流れになっている。第 2 部では、「現代のニーズを満たしていく人形劇文化とは何か」をテーマとして、津田塾大学学生による見解を展開している。30 分弱の発表時間で 72 枚ものスライド（資料 2 参照）⁸を使用した。

スライド作成時、学生が直面した問題の一つは、人形劇のインパクトや精密さをどのように表現するかということであった。たとえ日本語であっても、人の感受性を刺激する言葉を選ぶことは難しい。また、ある日本語表現や単語が、英語に直接存在しないこともあった。例えば、プレゼンテーション原稿には、日本語で「（西洋の人形劇で）『人形をどう見せるか』ではなく『人形とどう演じるか』に関心が置かれるようになりました」と表した一文がある。この表現は日本語でも非常に抽象的であり、最終的には “Western puppeteers' interests moved from ‘how to perform by USING puppets’ to ‘how to perform WITH puppets’” と工夫し、伝えたい内容と言語の不一致を防ぐため、動画や画像を引用した。

動画や画像の使用は、プレゼンテーションを単調なものにしないためにも効果的であった。素材集めにはどの学生も非常に多くの時間を要した。状態が良く、プレゼンテーション

⁷ 総合政策学部の新海尚子教授の紹介により、同研究科にて広報した結果、参画頂いた修士課程・博士課程の学生である。彼らの中には、フランス語を理解する学生もあり、プレゼンテーションの仏語訳の監修にも多大な協力をいただいた。

⁸ パワーポイントのスライド数は 72 枚であるが、アニメーション機能を用いて、複数の写真が 1 枚のスライド上に次々と現れる演出をしたスライドも複数含まれる。そのため、「資料 2」には、各場面のスクリーンショット（計 91 枚）を収載している。

で使いやすい画像・動画を使用するため、今まで経験したことがなかった画像・動画の編集作業に挑戦したメンバーも多かった。自分では見つけられなかった画像について、他都市を担当している学生に検索協力を仰ぐこともあった。

3. 7 発表練習

原稿とスライドがほぼ完成した段階で、発表練習（英語 Speaking 練習）を始めた。総合政策学部から4名、英文学科から1名の合計5名が発表者を務めた。発表部分を振り分け、交代しながら発表していくことになった。発表者全員での練習は、千駄ヶ谷キャンパス内で3日間計12時間、本番の会場で1回行った。

教員の指導のもと、発表者間で課題を見つけていった。特に注意を要したのが、単語の発音と文の区切りだった。プレゼンテーションは音読とは違い、読み上げる原稿の中に注目してほしい点が存在する。そこを強調するように読む練習を重ねていった。どうしても上手く発音できない表現や、観客の立場になって聴いた時（Listeningをした時）に分かりにくい単語は、指導教員のもとでさらに修正した。また観客を飽きさせない工夫として、各都市の名前をコールして、来場者に歓迎の拍手をする演出もこの段階で決定した。

また、千駄ヶ谷キャンパスで練習を行っているときには、パソコン設置場所と発表者が立つ位置が同じだったため、発表者自身がスライドを動かす練習もしていたが、現地入りした際、本番ではパソコンと発表者の位置が離れていることが判明した。急遽、スライドを動かす担当者を募り、総合政策学部の学生2名が担当したが、この2名はスライド作成を中心になって担っていたため、問題なく対応できた。

4. 結果・考察

4. 1 英語プレゼンテーション（8月10日）

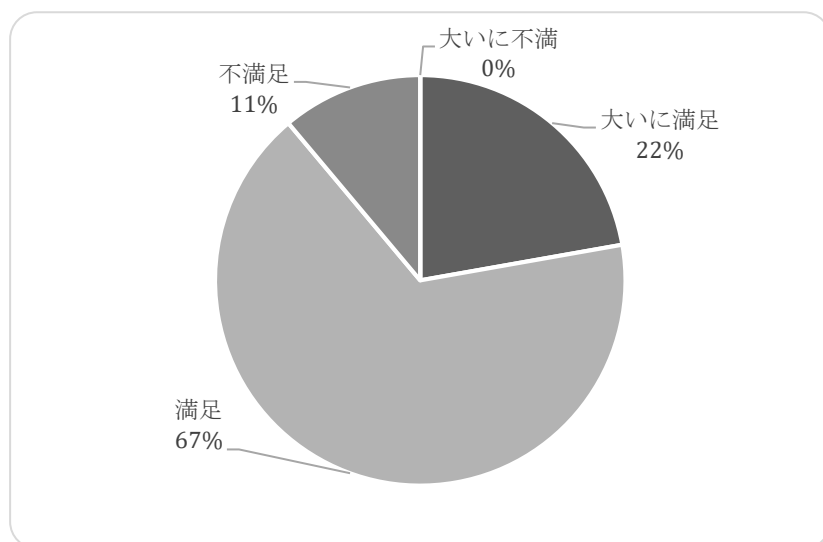
英語プレゼンテーションは概して成功だったと言えよう。参加者が食事や会話を楽しむ立食形式のレセプションパーティーにおいて、30分弱の英語プレゼンテーションを行うことは、観客の注意をどこまで引き付けていられるかという観点から少し不安もあり、発表者を務めた学生にとっても不慣れな環境ではあった。しかし、発表者の口調は練習時以上に観客に訴え語りかけるものとなっていた。また、各都市の名前をコールした際、呼ばれた都市の参加者が“Here!”や“Hi!”と応えてくれたこと、クイズを出す場面で観客から大きな声で反応があったことも、発表者のパフォーマンス維持・向上に寄与した一因と考えられる。

実際、プレゼンテーション後、観客から学生・指導教員に対し好意的なコメントが多数寄せられた。AVIAMA 会長から厚い御礼の言葉をいただいたほか、フランスのシャルルヴィル・メジエール（Charleville-Mézières）市長からは「プレゼンテーションを聞いたよ、良かったよ」と、またスペインのトロサ（Tolosa）市・セビリア（Seville）市の参加者からは「楽しかった」とのコメントが学生に寄せられた。なかには「プレゼンテーション内で紹介された作品にエンジニアとして参加していた」と言って学生に声をかけてきた参加者もいた。教員に対しても、AVIAMA 関係者や国際人形劇連盟日本センター（日本 UNIMA）など、人形劇を専門とする方々より「人形劇の関係者でない立場から、人形劇を語ってくれる機会がなかなか無いので貴重なプレゼンテーションだった」との感想が寄せられた。また、

今回の発表資料は、各国の人形劇の歴史や現代の文化について、包括的に捉え紹介する貴重な内容であるとの評価をいただいた。

英語プレゼンテーションの内容については、資料 1 に原稿とその日本語訳、資料 2 にスライドを掲載している。

図 1 英語プレゼンテーションに対する学生満足度



英語プレゼンテーションに対する学生への事後アンケートの結果は図 1 のとおりである。回答数 9 名中、1 名を除く 8 名が「大いに満足」または「満足」と回答しており、学生にとっても満足度の高い取組であったことがわかる。「大いに不満」と回答したものはおらず、「不満」と回答した 1 名についても「内容を深めたり、話し方を練習したりすることはもっとできたはず」とコメントしており、より高い精度を目指す動機ゆえの回答と考えられる。

なお、英語プレゼンテーション実施から得られた課題として、学生から「インターネットから信用性の高い情報を得ることの困難さ」が挙げられたことも付記しておきたい。上記 3.4 のとおり、100%の学生がインターネット（英語表記）から情報を得たと回答しているが、インターネットに掲載されている写真の出典に確証が持てないことが頻発した経験から、「今後私達学生は、インターネットとの距離感を慎重に測っていくべきだと感じる」とのコメントも寄せられている。

4. 2 通訳アテンド（8 月 10 日～12 日）

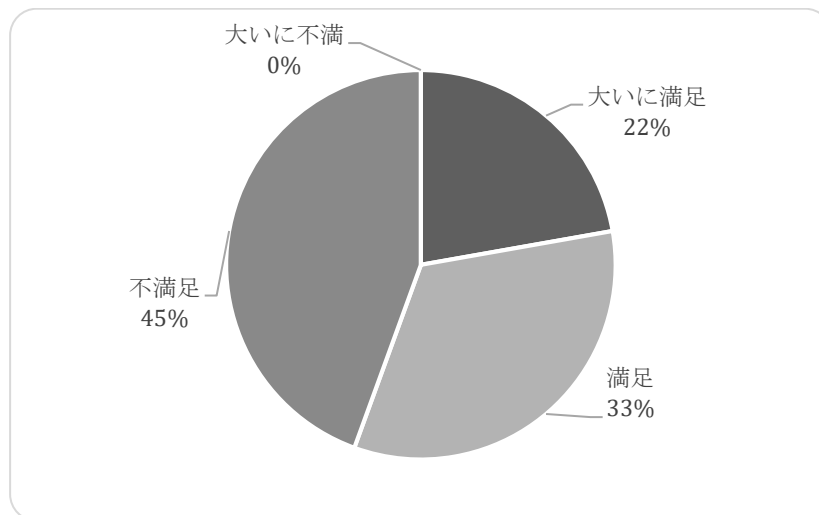
英語プレゼンテーションの時間以外は、学生は各担当都市に分かれ、AVIAMA 総会参加者が飯田市街観光や文化体験をする際の通訳アテンドを担った。

AVIAMA 総会参加者には、必ずしも英語が堪能ではなく、母語（スペイン語、フランス語など）での会話を要した方もいたため、英語の活用を期待していた学生にとっては、当初「予想していたよりも英語が使えない」という印象を持った者も居たようだった。そのため、事後アンケート（図 2）では、「大いに満足」または「満足」と回答した学生が過半数を超えたものの、「不満」と回答した学生も相当数いた。しかし、「不満」と回答した学生も日

を追うごとに、「身振り手振りで必死に伝えることで、コミュニケーションが取れることに気づいた」とコメントしており、**nonverbal communication** の価値を体感する貴重な経験となったことが分かる。別の学生は、「言語をコミュニケーションツールの一つだと捉えることが大切だった。言葉が使えなくても、一生懸命サポートする姿勢は言葉を超えて伝えることができたはずだ。」と振り返っている。

英語でコミュニケーションが取れた学生からは、「日本に居ながら英語がかなり使え、他国からの要人とコミュニケーションが取れたので満足」という感想が寄せられた。また、「リサーチしていた都市だったから話すネタがあり、リサーチでは知り得なかったことを直接専門家から聞くことができた」という、プレゼンテーション準備を通して、人形劇や AVIAMA 参加都市についての知識を得ていた (**background knowledge** を醸成できていた) ことへの効果に言及したコメントもあった。

図2 通訳アテンドに対する学生満足度



5. まとめ・今後に向けての抱負

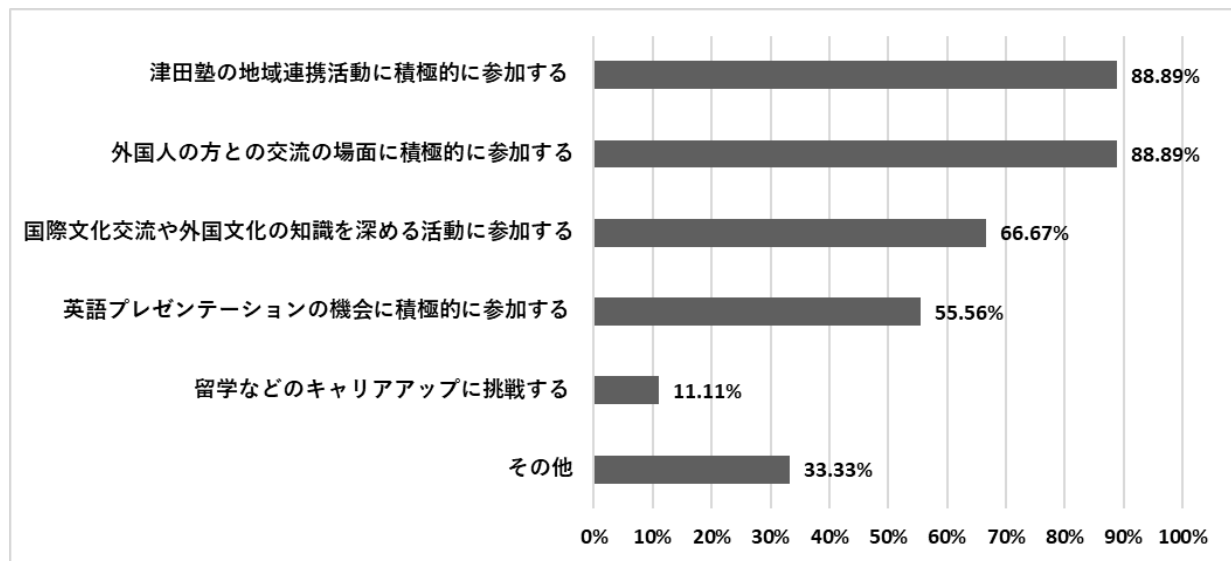
飯田市と津田塾大学の協定に基づく最初の取組である、「世界人形劇フェスティバル」および「AVIAMA 総会」に関連した取組とその経緯・手法について述べてきた。

人形劇についての事前知識を全く有していなかった学生にとって、決してハードルが低いタスクではなく、いざ準備を開始すると、特に英語プレゼンテーション準備を間に合わせることに必死だった感はある。しかし終わってみれば、「自分たちはもっと出来る。次はもっと工夫したい。」という前向きな自信を持つ結果になったようだ。実際、学生への事後アンケートの結果、88.89%の学生が、今後も津田塾大学の地域連携活動や外国人との交流の場に積極的に参加したいと回答している（表4）。

最後に具体例として、学生からのコメントを次に引用する。「リサーチした内容を専門家と会話の中で話して新しい発見をしたり、その国のことを知ったりすることがとても意義のあることだと感じた。引き続き、今後もこのような国際交流の会議の場に参加したい。準備の段階で一糸座にお話を伺えたのはとてもリアルだった。リサーチの仕方からプレゼンの仕方からもてなす方法から色々なことを学ばせてもらった。また現地では色々な方と親睦を深められたり、飯田の街を少し内側から観察できたりして、とても面白かった。 AVIAMA で

の活動で学んだことと経験は正直、色々なことに活かせると思う。」

表4 AVIAMA 総会の活動を、今後どのように生かしていきたいか。



(回答数 9 名、複数回答可)

今後は、プレゼンテーション内容を幅広い形で対外的に発信し活用したい。また、人形劇の魅力を学生が目線・立場から伝えるとともに、日本の人形劇文化の推進者としての飯田市の活動に積極的に参画したい。「人形劇のまち」40 年を経た現在、飯田の人形劇関係者も次の展開を模索中であるという。具体的には、今回の AVIAMA など、人形劇を通じた国際文化交流の成果の具現化、人形劇を通じた地域の産業や歴史の発信、人形劇界の取組（ソーシャルインクルージョンなど）への貢献などが検討されている。また、次世代の人形劇文化を担う若手の育成も欠かせない。飯田の人形劇文化を担う若手人材の実践や取組に、大学生が人形劇の観客の立場から参画する形で、より訴求力のある人形劇の魅力発信に取り組みたい。

6. 謝辞

本プロジェクトは、津田塾大学総合政策学部・伊藤由希子教授の指導のもと、津田塾大学連携推進センター、長野県飯田市、サントリー文化財団「地域文化活動の実践者と研究者によるグループ研究助成」の支援を得て遂行された。本プロジェクト実現にあたり多大なるご尽力とご協力をいただいた、飯田市ならびに「いいだ人形劇フェスタ」関係者の皆さまに感謝の意を申し上げます。また、学生訪問に際しては、江戸糸あやつり人形一糸座、公益財団法人現代人形劇センター、チェコセンター、喜之助人形劇フェスタ実行委員会（以上、順不同）の各ご関係者、人形劇関係者の皆さまに温かいご理解とご助言を賜った。また名古屋大学大学院生の Amibang Awah Martin、On Ni Chan、Martin Dumas、Imbolason Augustin、Xiaoyan Lyu、Waruni Perera（敬称略）はこのプロジェクトの成功に欠かせない仲間であった。この誌上をかりて、重ねて御礼申し上げる。

参考文献

- Ellis, R. & Shintani, N. (2014). *Exploring language pedagogy through second language acquisition research*. London: Routledge.
- Grabe, W. & Stoller, F. L. (2011). *Teaching and researching reading* (2nd ed.). London: Routledge.
- Richards, J. C. & Burns, A. (2012). *Tips for teaching listening: A practical approach*. NY: Pearson Education.
- 津田塾大学. (2018). 「飯田市との包括連携に関する協定締結」 『TSUDA TODAY』 第 107 号, p.4.

添付資料

- 資料 1 : AVIAMA レセプション (2018 年 8 月) プレゼンテーション (英語・日本語訳)
- 資料 2 : プレゼンテーションスライド
- 資料 3 : プレゼンテーションスライド 出典一覧